

光は東方より

山田智彦



新潮社版

光は東方より 山田智彦 新潮社版

光は東方より

一九七四年八月一五日印刷
一九七四年八月二〇日発行

著者 山田智彦

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一―
編集部(03)二六六―五四―

振替 東京八〇八

三秀舎印刷 共同製本

定価 七八〇円



© Tomohiko Yamada
Printed in Japan 1974

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

光は東方より

第一部

一

加納の一家が横浜へ引越しする、という噂が田舎の街のあちこちで囁かれはじめてからもまだ加納栄一郎は氣持の整理がつかないでいた。もとより引越しの件は彼自身が決断を下したのだし、妻も納得済みであつた。しかし、この年になつて居を移すというのは理由はともあれ、億劫なことであつた。

彼は七十一歳になつていた。六つ違いの妻は六十五歳であつたが、二人共一時代前ならばもう先祖伝来の墓地で眠つていてもよい年になつていた。と言つても、彼が退職して一年が経過したにすぎない。七十の年まで、加納栄一郎は他人からみれば苛酷としか思われない職業に従事して、立派にその責を果してきたのである。

彼は日本の代表的な船会社であるK商船に長年勤務して海上輸送に貢献したかどで、三年前に黄綬褒章を貰つていた。現在岐阜市に合併されて町になつたとはいへ、彼の住んでいる所はもともと繁華街まで出るにはバスで三十分もかかる村だったので、加納栄一郎の勲章受章は近在ではまれなニュースだった。地方新聞の記者が訪れたり、町の顔役たちが挨拶に来たり、親戚知人がいれ替りたち替りあらわれたりで、ちょうど休暇で下船してきた彼は時ならぬ騒ぎに巻き込まれ

てゆっくり休養するどころではなくなった。

親類だけでの内輪の祝賀会がすむと、古い友人たちの集り、町長の肝煎りによる町会の祝賀会、青年団と消防団の主催による宴会を兼ねた講演にまで引っぱり出されて、彼は一度に理不尽な有名税を無理やりに払わされた。

もともと、こうした騒ぎが際限なく続いたわけではない。

世間の人間が熱しやすく冷めやすいのはこの橋田町でも同じだった。ただ、時折、町の成人式の日などに何人かの有力者たちの間にまじって一席しゃべらされるようなことはあった。そんな時、彼は町の連中がまだ自分を必要としているのを知って、ひどく愉快になった。たいして話がうまいわけでもないのに乞われるままに出掛けて行くのも、町民たちに忘れられないための努力であつた。

かつて、加納栄一郎はK商船でもうるさ型の船長として一種の名物男になっていた。短軀で小肥りの彼は裸になってみると、筋肉のかたまりのような印象を与えた。若い頃に鍛えた筋肉が中年を過ぎてからはたるみをみせて、肥満体へと移行していったのであるが、もともとたいした運動をしたこともない連中にくらべると、胸の肉のしまり具合などがまったく違っていた。拳で叩くと、跳返るような弾力があつた。その弾力もいまは衰えてきたし、筋肉そのものが落ちてきた。体重も十年前にくらべると、十キロ以上減っていた。それでもこの年になって六十キロをきつていなかった。彼の身長から考えると、むしろ肥りすぎているような印象がなきにしもあらずであつたが、彼自身はこのくらいの体重がちょうどよいと思つていた。食欲は旺盛であつたし、散歩に出て、いつの間にか競歩の選手でもあるかのような歩き方をしていた。

彼はむしろ妻の軀のあちこちに、自分には見当らない若い老いの翳を見つけた。はじめ、それは彼

の中に奇妙な満足感をもたらした。けれども、老いの翳というものが、ありていに言つてしまえば美から醜への変化であるのは間違いないので、妻が醜くなるということは、彼等夫婦の老後の生活がそれだけ味気なくなるわけで、笑つてすませられる問題ではなかった。それなのに、彼は一人でほくそ笑んでいた。さいわい、彼の曖昧な笑いは誰にも見つけられなかったが、この笑いの中にはかつて若い頃親しかった友人に妻の容貌を褒められた時のような照れくささもあつた。

夕食後妻と二人きりになった時、

「ずいぶんお前も皺がふえたな」

と彼は言つた。

「おとうさんだって、白髪と禿でどうしようもないじゃありませんか」

そういう妻の晴子の口調には余裕がある。

女というものは不思議なものだ、すぐに環境に順応する。とくにこの女は夫の自分に調子をあわせて暮すことに何のこだわりもつていない。それは彼女が彼と同郷の女で、彼の隣村の出身であるのと何かかわりがあるのだろうか。生れが同じ土地の人間であるため、お互にはじめからわかりあつたつもりで、何となく気を許したまま何年も過ぎ去ってしまったのか。なにしろ、結婚してから四十六年にもなるのだから。……これだけの間連れそつてこられたという事実だけをとりあげてみても、それはそれでたいしたものだ。その間、殆ど諍いらしい諍いもしたことがなかった。不穏な空気がまっただけでなかったわけではないが、はつきり記憶に残るような争いは思ひ出せなかった。反対に愉しい記憶はたぐればたぐつただけいくらでも出てきた。彼は船が入港して、二日以上碇泊するのが明らかになつた場合は、土地のホテルか旅館を予約して、必ず妻を呼んだ。

加納栄一郎が出世が早く収入の多い外国航路を嫌って、国内の航路ばかりを選んだのは妻と出来るだけ永くいっしょにいたいという彼にしてみれば切実な願望のためかも知れなかった。しかし、彼自身は外面的にはそうした感情をとるにたらぬ女々しい気持というふうに考えていて、とにかく海に出るといふ第一義的な仕事の前にはどんな犠牲をも甘受するつもりになっていた。

彼には二人の弟が居て、二人とも彼と同じ職業を選んでゐた。それぞれに違ふ船会社で、職種も待遇も違ふために微妙な違いはあつたにせよ、兄弟三人がいわゆる船乗りになつてゐたわけである。濃尾平野の岐阜からやや大垣寄りの、長良川下流の一寒村である当時の橋田村では三人いる息子が全員船員になるなどという話は聞いたこともなかった。橋田村の人たちは大半が農家で、一部に簡単な織機で着物地を織る機屋はたせと川魚を獲る漁師たちが棲みついて居たが、たいていは自家の職業を継ぎ、二男三男も分家をするか、近隣の村へ養子に入つたりして、似たり寄つたりの仕事をしてゐた。

加納の兄弟がまるで村をとび出すように出て行つて、こともあろうに海の上にまで漂い出たのは、ほかならぬ父親の急死のせいであつた。栄一郎が十六歳の時に父が職業上の事故で亡くなつたために、彼は一家の生活をささえる必要にせまられた。母と二人の弟、寛次郎と新三郎、十歳と四歳であつたこれらの扶養家族を養うために、彼は少しでも実入りのいい職業について、一円でも多く母親に送金しなければならなかつた。

さいわい、亡父の友人の薦めと紹介の勞によつて、彼はただちに能登半島の七尾にあつた船員養成所に入所し、三ヵ月の速成教育を受けて、大手船会社の一つであるK商船に見習船員として採用された。

船に乗つていれば、自分の食費は出ないし、作業服は支給されるし、寄港地の港で飲み食いや

遊びで費消しなければ、彼自身の小遣いは殆どいらないうってよかった。栄一郎の送金で郷里の暮しは何とか賄えたのである。田舎の小学校の高等科を出たばかりで、威勢がよく生一本ではあったが馬鹿力ぐらしいかない男がこうして一家の生活を支えたというの是一種の美談でもあった。母親や村人たちのいささか無礼な驚きぶりもさることながら、彼自身が朝陽の昇るような自分の力が信じられなくて、四六時中頬が火照りっぱなしのような戸惑いと心の昂ぶりを覚えていた。何もかも責任はすべて自分の肩の上に乗っていたとしか思えなかったあの頃が一番愉快だった。しかし、実際には前途に横たわっているのは涯てしない海に似た掴みどころのない不安ばかりであった。就職が希望にみちた人生の門出だという卒業式の校長の訓辞や村人たちの励ましなどはすぐさまどこにかすんでしまつてあとかたもなくなつていた。きわめて即物的な、この先も何とか食えるのかどうか、といった不安があった。いまのいまはどうにか夜露をしのいで飢えずにいるが、もし自分の身に万一のことがあり、命を落さないまでも病気にでもなつたら、母と幼い者たちはどうなるのか、といったたぐいの心配であつた。

そのためかどうか、彼は家を離れていても淋しさを知らなかった。淋しがつてなぞいられない、という気持がいつも心の中のどこかにこびりついていた。たしかに気持が張りつめていたのだ。自分自身に対してはまったくといってよいほど無欲で、とくに金を貯めようという気はなかった。その代り、母と弟たちのためには、何でもきりつめて少しでも多く送金した。そのために給料は年に一度しか上らないのに送金額は毎月少しずつ増えていた。

ああいう気持にもう一度なれたら、生活に張りが出てくる。二人の弟たちは、いったいいま何を考えているのだらう。お互に女房や子供がいる。自分の方でも嫁に行つた長女には男の子が生まれていたし、次女もつい先月嫁にやつたばかりだった。横浜にいる長男夫婦にはまだ子供はな

つたが、こっちの方もこ一、二年のうちに一人位は生れるに違いない。弟たち二人の日常生活もおそらく似たりよったりであろう。いや、それぞれ自分とはかなり違った生活を送っているのではあるまいか。どんなふうに違っているのか、およその想像はついても、細かい点はともわからない。わからなくてもよいのだが、彼にはそのわからない部分を知りたい気持ちが急に強く萌した。

あるいは二人とも自分よりしあわせなのではなからうか？ そう思うと、急に眼の前がほの昏くなったような気がした。しかし、どうして弟二人がしあわせであってはいけないのか、そう自問すると、彼はただちに首を横にふった。その昔、彼の仕送りを受けていた母は、亡くなってからもう十年にもなるのだから、かつての彼の扶養者は現在は二人の弟だけになっていた。

その二人に対する親しい気持は年と共に薄れていくようだ。知らず識らずのうちに湧水が少なくなつて、ついには涸れてしまふ泉のように彼の中にあつた弟たちへの思いも少しずつどこかへこぼれ落ちてしまったのであろう。妻や子供、それに孫たちの存在が母や弟たちにとってかわつたのはやむを得ないにしても、何か怪しい気配を否めないのも事実であつた。

自分の中にはいまでもまだ弟たちを支配下においているという錯覚がある。だから彼等が自分よりしあわせなのは不当な現象であるかのような気がするのだ。ただ首を横にふつたぐらいではこの気持は薄れてはいかない。だからといって、彼はそれ以上己の心を苛んでみようとは思わなかつた。

何年間も養つてやり、義務教育とはいへ、学校まで出してやつた。たしかに弟たちは二人共彼に感謝していた。一人前になれたのも兄のせいだ、とよく彼等は言つた。しかし、栄一郎は弟たちが最後にそれを口に出したのは、かれこれ二十五年も前であることを知つていた。終戦直後の、

食糧難が骨身にこたえた時代だった。それだからこそ、二人の弟たちは食うや食わずで育った子供時代の生活を思い出したのだ。そうでなければとても当時の兄の仕送りのことまで思い出してはくれない。

これは第二人が薄情な人間であると言うよりは、むしろ時が人の心の中をきれいさっぱり洗い流してしまったとも言った方が当てている。古いあまり愉快でない記憶を、時の流れが曖昧な、まるで架空の出来事ででもあったかのように思い込ませてくれた結果であるに違いない。それに、これは何も弟たちだけに限った話ではない。第一、子供たちだってそうだ。

横浜にいる長男の峰男にしても、嫁にやった二人の娘、それに未婚の潤子、この四人の子供たちがはたして自分にどれほど感謝しているかわかったものではない。親が子供を育てるのは当たり前だ、ぐらいのことしか考えていないのかも知れない。だが、それなら自分の父はどうだ。早死したために父親としての義務を果たしたとは言えないではないか。けれどもせんじつめてみれば自分はやはり父に感謝している。父の死のためにつらい思いをしたのを父に転嫁できないのは仕方なかった。母も弟たちもつらい思いをしたのは同じだろうが、彼等はすぐさま父に代る扶養者があらわれたことでどれだけ心を慰められたか知れない筈だ。

それならばお前はどうか。お前は働くことに生甲斐を感じなかったのか。そう言われてみると、彼は自分が一家を養う必要を痛感し、何事についてもすべての責任は己が負うと決めたために、どれほど心が奮いたつのを感じたか、あらためて思い起した。

ああいう気持にはなかなか知れない。下手をすると、一生のうちに一度も心が奮いたつのを知らないで終る人間がいるかも知れない。そんな連中は不幸な手合だ。息子や娘たちもいままでは暢気にやってきたが何かのひょうしに、ほんとうに生活する、とはどういうことなのか、思い知

ってほしい。

だが、自分がそんなふうに言うのは少しばかり不遜な感じがする。時代が変わったのだから仕方がない、人の考えもそれにつれて変ってしまつた、そう考えるのは容易だ。それならばどう変つたのだ、と言われてみると彼には答えられなかった。知らず識らずのうちに時代が変わっていつて、気がついてみたら自分の思考とはまったく相いれないものになつてしまつた。しかもこうした相違に彼はごく最近まで殆ど気が付きもしなかった。昨年の正月に久しぶりで子供たち全員が集つた時に彼は自分の少年時代の苦闘物語をはじめて、儉約と貧窮の必要性を説いたが、誰も相槌をうたなかつた。それまでの賑やかな雰囲気は崩れて、娘たちは席を立ち、息子は咳払いをした。まだ同居している末娘だけが同情のまじつた曖昧な微笑を浮かべていた。

彼は自分がそれほどの失策をしたとはどうしても思えなかつたが、こうしたささいな話題にこたわればこたわるほど家族の輪の中から孤立してゆくのを感じた。

二

横浜への引越しは息子夫婦の懇請によるものだった。懇請と言えば聞こえはいいが、事實はかなり恩きせがましい申出でもあつた。息子の勤務先が東京の新橋であるため、いまのうちに東京の近辺に土地を買つて家を建てたい、というのが本当の希望であつた。将来のためにはそうするのが一番よい、と峰男は言つた。いずれ両親の面倒をみることになるのだから、いまから同居した方が姑と嫁の間もしっくりいくのではなからうか。

そう言われてみると、彼は息子の意見をもっともだと思つたし、息子夫婦の方から同居の申込

をしてきたという事実が彼等夫婦を喜ばせもした。だが、そのためには老後をすごすつもりでいた郷里を捨てなければならなかった。いつかは息子か郷里かの二者択一をせまられる時がくるのを彼は以前から予想していた。けれどもその度に彼は問題を忌避してきた。深くは考えなかった、と言ってもよい。

息子を都会に就職させた時から、彼はもうこの問題に突き当たってきたわけであった。それなのに一度も真剣に自分の真意がどこにあるのか考えてみようとしなかった。無意識のうちに、いや意識的に厭なことは先に延ばしてきた。その結果、とうとう今度という今度は追いつめられるところまで追いつめられてしまった。

追いつめられてみると、彼は案外あっさりと承諾してしまった。一泊どまりで帰省してきた息子に話をきり出されてから、いくらもたないうちに、考えに考えぬいた結論をあえて口に出したというように、一、二度口ごもりはしたものの息子の意見に全面的に賛成の意味の意思表示をしたのだった。

息子が帰京してから、彼は妻に意見を訊いた。

「あれ、あんなにはっきり賛成しといて、いまさら何を言うの」と彼女は答えた。

「それはそれでいいから、お前の本心を教えてくれと言ってるんだ」

「本心も何もないわよ、とうさんが行くって言えば行くより仕方がないじゃないの」「なるほど」

彼はそう呟いてそれ以上妻に尋ねるのをやめたが、彼女の返答に少しばかり満足はした。妻がどこまでも自分についてくる気持でいるのをあらためて確認したからだ。もし、妻にたとえ

冗談でも、あんた一人で行ったらどうか、などと言われたら愉快な気持にはならないだろう。

その翌日、彼はこの件を報告するつもりで隣町に住んでいる従兄の家を訪れた。

五年前まで隣同士の村であったが、いまは両村共市に合併されていた。従兄の加藤竹治は彼より一つ年上であったが、すでに三年前から楽隠居の身であった。そのせいか風貌は五、六歳上に見えた。竹治は土地の農家の出身で土建業をしていたのだが、建築現場から落ちて足を痛めてからは、思いきりよく商売をやめて、給料取りの息子に扶養されていた。もともと田舎の老爺という感じを免れなかったので、老年になるにつれていつそう風采のあがらぬ姿かたちになっていた。隣町の方が市の繁華街に近いため、バスの発着する間隔も短く、何かと便利になっていた。竹治の息子は峰男より二つ年上の三十六歳だったが、いまだに独身だった。市の中心部にある大手の証券会社に勤めていて、給料もなかなかよいようだった。

竹治の家は自家で使う程度の野菜畑はもっていたものの、生活は息子の給料で賄っていた。二人の娘たちはそれぞれ大阪と名古屋に嫁いでいたので、一家は老夫婦に息子の三人暮しだった。昼過ぎに竹治の家に着くと、二人は陽当りのいい縁側に出て煙草に火を点けた。

「この年になるまで煙草を吸っていて、肺癌にもならぬのだから、お互にしあわせだと言うべきだなあ」

と栄一郎は言った。

「いいや、病気なら、かえって病氣の方がいいくらいじゃ」

と竹治は顔をしかめて答えた。

ここしばらく見ないうちに竹治はまた老いこんでいた。いくらか充血したように思える眼に目脂がたまっているのを見て、栄一郎はあまりいい気がしなかった。年をとったらもう少し清潔に

しなければいけない、と彼は思った。着ているものも普段着だとはいえ、何となく垢じみていてみすぼらしかった。

「どうやね、健治君は元気かね、よく小遣いをくれるかね」

栄一郎がそう言うのと、竹治は口を尖らせて眼を剝いた。白眼の部分がやはり充血している。

「なあーんにも」

と彼は力をいれた。

「くれやせんわ！」

「そうかい、そりゃあいかなあ」

栄一郎はそう言うより外に仕方がなかった。多額の年金を貰っている彼にくらべて、竹治は現在にはまったくの無収入だった。

「それじゃ、困るだろう」

相手が黙っているの、栄一郎は重ねて言った。

「なあに、そんなこと、健治のやつは考えてもくれんわね」

「気がつかんのやろう、親子やないか、気軽にねだつてみたらいいがな」

「ねだつてもみたわさ、だけど、その度に苦虫噛みつぶしたような顔をされてみい、何度も言うわけにはいかんわ」

「ふうーん！」

栄一郎は思わず溜息をついた。

彼は自分がいつか峰男に小遣いを請求する場面を想像してみ、不愉快な思いを噛みしめた。もし、竹治のように拒絶されたら自分はどうするだろう。そんな目にあったら、きっと我を忘れ

るに違いない。我を忘れた結果、どうなるのか、彼はその先を想像するのをやめた。

「病気にでもなつて、早うポッキリいきたいもんや」

竹治がそう言うのを聞くと、栄一郎はあやうく同調しそうになつて慌てて唇をかみしめた。

「莫迦なことを言つてはいかんなあ」

と彼はたしなめる口調になつた。

「莫迦にもなりたいわ」

竹治はあくまで愚痴を続けるつもりらしい。

「どうかしたのか」

と栄一郎は言つた。これでは横浜への引越しの件も言わない方がいいかも知れない、竹治の気分を損ねるだけならまだしばらくは先に延ばした方がいい。そう決めると、栄一郎は竹治の話を聞く氣になつていた。

「健治はわしらに月四万円しか渡さんのや、その四万円で一家三人何もかもやらんならんのや、食費は上る一方やというのに着るものから付き合ひから、市民税までこの中から払わんならん、わしの小遣いどころか、お茶菓子代にもこと欠く始末や」

「そりやあ、ちよつときついなあ」

「食べ物も健治には刺身や肉をつけるが、わしと家内は野菜の煮つけか漬けものしか食つとらん、それでどうにか暮せるのや」

「息子と同じものを食べとらんのか」

「そうや、同じにしとつたらやつてゆけんで、家内が息子だけに特別料理をつけとるんや、家内はもうわしのことなんかかまいもせんわ、息子の方ばかり向いて、にこにこしながら御機嫌をと